

## (2) 磨けばダイヤに

### 大人より格段早い進歩

「子どもはだれでも神童である」と私は言いました。それに対して、「世の中に神童がいることは否定しないが、それは極めて少数である。多くは当たりまえの子どもであって、“子どもはみな神童”とは、言い過ぎもはなはだしい」という反論がよくありますので、さらに一言しておきます。

私が言う“神童”とは、宝石にたとえるなら“ダイヤモンド”だということです。つまり「幼児はだれでもただの石ではなくて、ダイヤモンドである」ということです。

ただ、いかにダイヤモンドとは言え、よく磨き上げられて、初めて美しい宝石になるのであって、地中から掘り出されたままでは、決して宝石の美しさはありません。ただの石は、どんなに磨いても決して宝石にはなりません。ダイヤモンドなら、磨けば必ず美しい宝石になります。そこに、ダイヤモンドとただの石との違いがあります。

幼少期に適切な学習をさせるならば、子どもはだれでもすばらしい才能の持ち主になることができます。だから、幼児はみなダイヤモンドであって、ただの石ではありません。これが、私が「子どもはだれでも神童である」という理由です。

「努力をすれば才能が伸びるのは、何も子どもに限ったことではない。大人だって伸びるものだ。それなのに、幼児に限るように言うのは

やはりおかしい」と、今度はこんな反問が聞かれそうです。

もちろん、大人でも努力すれば、才能は伸びます。しかし、それは「ただの石でも、磨けば美しい飾り物になる」ということです。ただの石は、どんなに磨いても、決してダイヤの輝きは現われないように、大人になってからの努力では伸びる程度が知れているのです。

子どもの場合の進歩は、大人の進歩とは異質とも言うべき程の違いがあります。(1)の、珠算十段の幼児を例に考えてみましょう。

$690,237 \div 813$ というような大きな数の計算を、答を書き込む時間を含めて平均三秒間で解くなどという能力は、大人になってから始めたのでは絶対に獲得できるものではありません。幼児だからこそ、わずかの期間で獲得できたのだと思います。

私の友人に囲碁の好きだった男がいます。暇さえあれば、囲碁の本を手にして研究していました。早くから秀才の誉れ高く、囲碁には大学時代から熱中し、二十数年間も研鑽したので、棋院から四段の免許状を取得しました。その友人が、中学一年生の院生(棋院で修業している少年)と手合せしたところ、全く歯が立たず、以来、自信を失って研究するのがばからしくなり、ついに碁石を手にしなくなりました。

頭が良くてあれほど熱心に研究しても、幼児から始めた者に比べると、伸び方がこんなにも違うのです。「鉄は熱いうちに鍛えよ」のことわざどおり、何事にも人間には鍛えるべき時期があることに疑いをいれる余地はありません。